

「青年海外協力隊」

則近 由貴

NORICHIKA  
Yuki

野生生物が  
息づく森を守りたい

大学時代、農学部で樹木の生態や林業について研究してきた則近由貴さん。森に興味を持ったのは、野生生物が好きだったからだ。「もともと、野生生物の保護に関わる仕事がしたいと考えていたんです。多くの場合、動物はすみかがなくなることが原因で絶滅に追い込まれます。だから、野生生物のすみかとなる森を守ろうと考え、大学院まで森林の研究に励みました」。大学院修了を控え、学んだ知識を生かす舞台として、則近さんが選んだのは、遠いアフリカの地だった。昨

## JICA Volunteer Story

### PROFILE

山口県出身。大学の農学部で樹木生理生態学研究室に所属。卒業後、2014年1月から青年海外協力隊(林業・森林保全)としてケニアで活動中。

# 「地域住民とともに森を守る」

多くの人々が森林に寄り添いながら生活しているケニア。則近由貴さんは、地元住民のコミュニティに入り込みながら、人々の生活と森の双方を守るために奮闘している。



年1月、青年海外協力隊として森林保全に協力すべく、ケニアの地を踏んだ。  
赴任先の町、エルダマ・ラビネの人々の生活は森と密着している。生活の主な燃料はまきで、森の木を枝を取ってまき集めをするのが人々の日課だ。また、家畜を所有している人が多く、森や山の奥で放牧された家畜は好んで若い木を食べている。人々の生活は質素だが、人間活動の小さな積み重ねで、森は少しずつダメージを受けていた。

山の一部は木々が伐採されてなくなっている上、森が残っているように見えても、ユーカリなどの木材用に植えている外来種がほとんどで、本来の原生林は少なくなってしまう場所も多い。「住民にとって、森は水や薬ももたらしてくれる大切なもの。彼らは、森を守らなければならないと分かっていますが、生活のためにはまきや家畜が必要です。だからこそ、森林保全は住民の生計向上を前提とした取り組みでなければなりません」と則近さんは活動の難しさを説明する。

## 自分の役割は 「コミュニティの中に」

則近さんは現在、「ケニア森林公社」に所属し、エルダマ・ラビネのコミュニティに向いて住民たちが行う森林保護の活動を支えている。しかし、赴任当初は思うように活動ができず悩むこともあった。「オフィスで会議に参加しても、英語・スワヒリ語・現地語(カレンジン語)の入り混じる会話についていけず、肩身が狭い思いをしました」と当時を振り返る則近さん。

ならば、自分で自分の役割を見出そう——。そんな思いから、則近さんはできるだけコミュニティに足を運び、地域の人々がどのような活動をしているのか、



a.コミュニティの畑に住民みんなで植林する  
b.母親に連れられて植林を手伝う少女  
c.コミュニティの森林地域や居住地域を地図にまとめている  
d.子どもたちが植えた木は、将来木材としても活用される

何に困っているのか知ろうと努めた。「プロジェクトのワークショップや住民との話し合いに積極的に参加したことで、コミュニティの人々に日本の協力隊としての私の存在を知ってもらうことができました。初めはよそよそしく、住民同士の会話もカレンジン語でしたが、回を重ねるうちに、私にも分かるスワヒリ語で話してくれるようになり、今では現地語を教えてくれたりもします」と、すっかりコミュニティにも打ち解けた。

ケニア森林公社では、同公社が管理する土地を安く住民に売り渡し、その代わりに畑に木を植えて管理してもらうというプロジェクトを実施している。大きく育った木は同公社が伐採し、木材として売る仕組みだ。ケニアでは畑は重要な財産の一つ。この仕組みによって住民は畑を持ち安定的に食糧を確保できるようになる上、木の管理を通してまきを手に入れることができる。「木の管理の方法などについてアドバイスすると、住民たちはささいなことでもちゃんと耳を傾けてくれます。住民と親しくなったことで活動もしやすくなりました」と則近さんはやりがいを語る。

さらに、則近さんは最近、新たな挑戦も始めた。今までは種から苗を育てていたが、枝を切り取り土に植えて根を生えさせる「挿し木」の手法を新たに取入れたのだ。「まだ試行錯誤の段階で、配属先からは『難しいのではないか』とも言われていますが、うまくいけば種を購入する費用を節約し、同時に、苗を育てる時間も短縮できるので挑戦してみたいんです」と則近さんは意気込む。

「森を守るには時間がかかりますが、コミュニティの人々には、とても大切なことをしているのだ」と誇りを持ってもらいたいです。そんな思いを受けた木は、強く、大きく育つに違いない。



学校を回って植樹の指導をする則近さん。子どもたちと積極的にコミュニケーションをとっている